

Ⅲ 「自己教育力の育成・再考」

企 画 北尾 倫彦 (大阪教育大学)
 企画・司会 無藤 隆 (お茶の水女子大学)
 話題提供者 北尾 倫彦 (大阪教育大学)
 石田勢津子 (名古屋外国語大学)
 梶田 叡一 (大阪大学)
 丸野 俊一 (九州大学)

企画趣旨

無藤 隆

「自己教育力」、あるいは「自己学習力」、「自己学習能力」さらに「自ら学ぶ子ども」などと、呼び方は様々であるが、この10年あまり、その教育的な重要性が指摘され、特に、学校教育現場における実践的研究において、盛んに検討されている。これは、昭和58年中央教育課程審議会の報告に取り上げられたことが強く働いているに違いないが、同時に、教育現場で求められている課題であることも確かであろう。自己教育力を備えた子どもを育てたいという願いは、多くの教育関係者が共通して持っていることであるのだし、しかし、現在の学校が必ずしも十分にそれに成功していないことも認めざるを得ないのである。この意味で、ここに、教育心理学のきわめて重要な課題があることは明らかである。

この概念が出て、十年近くたった所で、改めて、自己教育力の育成をめぐるって考えてみることはいくつかの点で意義があろう。第1に、実践レベルでの研究から何が分かり、何が分かっているかを整理する必要がある。このことは、研究を進める上で当然なされるべきことであるが、実践研究を進める現場の先生方は、自らの実践に集中するあまり、なおざりになっているようである。この点は、自己教育力をめぐって自らの理論的展開を早くから進められ、また実践研究にもお詳しい北尾氏に整理をして頂き、現状の把握と問題点の指摘をして頂く。

第2に、教育心理学の研究の、現場から一步、二歩距離を置いたところでなされてきた研究を整理する必要がある。直接関連する研究は、残念ながら必ずしも多くなく、北尾、梶田(叡)、また波多野・稲垣・久原・無藤などが代表的なものとして挙げられる。関連する研究領域としては、特に、内発的動機づけなどの学習意欲の研究、また、学習主体としての自己の問題、第3に、学習を自らコントロールするときのメタ認知の問題、さらに、それらを具体的に実行する際の学習技能の問題などが挙

げられよう。心理学的に発想するならば、自己教育力は、人間が本来的に学ぶ存在であるという認識に立つ幅広い概念であり、多くの研究領域の知見に支えられねばならないはずである。具体的には、学習意欲の問題を自己学習システムの問題として展開されておられる石田氏、自己概念から出発し、包括的な「生きる」こと自体と結びつけておられる梶田氏、メタ認知概念を中心に認知心理学的な概念化を図っておられる丸野氏の三人の方に自らの研究・理論を中心に論じて頂く。学習技能については、共通の重要な論点として論じることにしたい。

大事なことは、単に、研究の論理だけを追求するのではなく、そこから、現場での自己教育力を伸ばしたいという願いに多少とも答え、また、現場の実践研究を支え、補う知見を提供し、さらにその含意を明らかにすることである。本シンポジウムをそのようなことに少しでも近づく1つのステップとするために、現場からの問題提起に対し、教育心理学研究者がいかにか答えるのかという点から論議したい。

学校における実践的研究から

北尾 倫彦

昭和58年11月の中教審・審議経過報告に自己教育力という言葉が登場して以来、学校での実践的研究のテーマの中にもしばしば取り上げられている。自己教育力の内容としては上記の報告に述べられた「主体的に学ぶ意志・態度・能力」という点で一致しているが、その育成を目指す教育実践の具体相にまで目を向けると様々であり、戸惑いがみられる。特に個々の実践と自己教育力をつなぐ理論が熟していないため、混迷しているといつてよい。以下には、個々の実践と自己教育力の間に介在させるべき概念として5つを取り上げ、それらに関する教育心理学的な理論づけの可能性を問うという形で提案を行った。

①課題意識 「何を学ぶべきか」をきびしく意識することから自己教育が始まると言つてよい。この課題意識を高めるため、課題学習を主体にした授業が行われるが、そこでは課題を選択、または設定させたり、課題についての自己学習から入るなどの工夫が試みられている。これらが動機づけの問題として、また課題の自我関与などの認知的な問題としていかに理論化すればよいのであろうか。

②主体的思考 自己学習の過程は自分の考えに基づく問